

ついで古びない紀行文の魅力

旅の名人、若山牧水

牧水の旅は気ままな漂泊のイメージがあるが、実際は、きわめて合理的な旅のスタイルを身につけていた。そして、人が気づかない土地の宝を見つけて出す。ついで古びない彼の紀行文の魅力とは――。

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀

●いけうち・おさむ 1940年兵庫県生まれ。近著に『世の中にひとこと』(NTT出版)、『東京ひとり散歩』(中公新書)、『日本風景論』(角川選書)、『祭りの季節』(みすず書房)などがある。

漂泊のイメージとは逆

牧水の旅姿は写真からわかる。旅程の長短によって多少は使いわけたようだが、大きめの帽子にマント、着物を尻っぽしりにして、脚絆にワラジばき。ふところに手帳、手に洋傘、荷物はいっさいを「合財袋」につめて一つきり。

旅をかさねるうちに工夫し、ムダを省き、もつとも効率的に最少のものを選びとった。大きめの帽子とマントは雨よけ、防寒用、さらに草地にすわったり寝ころぶときの敷物になる。洋服というものを持たず着物で通したのは、幼いころから着なれていたからだが、それにもう一つ、ひそかな理由があったかもしれない。牧水が旅したコースはおおかたが山

里で、当時、住人はほぼすべて着物が日常着だった。洋服はせいぜい官吏か外来の都会人に見かける程度。ことさらめだったり、警戒されはならないだろう。着物だとさりげなくその土地と土地の人にとけこめる。さもないと快適な旅ができない。脚絆とワラジは、古来、日本人が足のお伴にできた。そして牧水の向かうところには、ゴムや革製品は

かぎられた店にしかないが、布とワラ製品なら村々のよろず屋にぶら下がっていた。牧水の旅姿から「古い時代の人」を思ってはなるまい。巧みなコンビネーションであって、昔ながらの着物の一方で、街のモダンボーイが愛用していたようなフェルトの帽子やマントをちゃっかりと採用した。洋傘はけっこう高価な品だったが、これにかぎるのだ。雨以外にもステッキの代わりになるし、手

表で乗り物をしらべ、地図でこまかく地理にあたり、友人や知人から情報をもらって、その上で出発した。珍しく詩のかたちをとったなかで述べている。

枯草に腰をおろして
取り出す参謀本部
五万分の一の地図

当時、国土はすべて陸軍省の管轄にあり、地図もまた参謀本部より出されていた。その五万分の一を入念にながめて道をたしかめ、コースタイムを思索する。

路は一つ
間違へる事は無き筈
磁石さえよき方をさす

有名な「幾山河越えさり行かば」の歌などから、若山牧水には気ままな漂泊をしたようなイメージがあるが、むしろ逆だろう。きちんと時刻

磁石もちゃんと用意していた。

たしかに旅の途中で急に行先を変えたりしている。気まぐれだろうか？ とんでもない。予定してきたのはあくまでも机上のプランであって、いわば仮の線を引いたまでのこと。現実に直面して机上のプランがダメとわかると、即座に変更した。気まぐれと見まがうほど自由に変えることができたのは、地形をくまなく頭に入れ、たえずいざというときの心づもりをしていたからだ。

かつての旅の記録の作法であって、牧水の年譜などにも「奈智に遊ぶ」「千曲川上流に遊び」といった記述が出てくる。だが実際は「遊ぶ」などは、ほど遠かったことを牧水の紀行文そのものが示している。千曲川の上流部に入りこみ、源流をたずねたしだいは「木枯紀行」に見るとおりだが、水源地にあたる十文字峠